

中国語数量詞とアルの対照研究

藤小春

要旨：中国語数量詞は話題導入の機能（用法）がある。その機能を果たす場合、数量詞または“有+数量詞”で表すことが多い。当然その導入される話題は新情報である。日本語のアルも新情報の名詞を導入する場合もある。しかし、日本語のアルと中国語の数量詞（また“有+数量詞”）の異同に関する対照研究がこれまでほとんど見当たらない。両者の異同に関する説明がないため、中国語母語話者の日本語学習者は、アルを中国語の数量詞に訳し間違えるケースが少なくない。本研究では、日本語母語話者に対して、上記のアルの用法について調査し、中国語の数量詞と対照研究を行った。その結果、昔話においては、そのストーリーの場所、時間、人物を導入するとき中国語の数量詞（または“有+数量詞”）が必要であるのに対し、日本語のアルは以上のストーリーの三要素のうち、前者の二つだけを導入するとき必要で、登場人物を導入するときには使用してはいけない。昔話以外の一般文章においては、特定しない物事であれば、アルは以上の三要素を全部導入できる。これに対し、中国語の数量詞は特定するかどうかと関係せず、以上の三要素を導入するとき必ず必要である。

キーワード：中国語数量詞、日本語のアル、話題導入機能、新情報導入、特定する情報、非特定する情報

1. はじめに

中国語の単数数量詞（後文で数量詞と称する）は会話において初登場の談話話題名詞（後文で話題名詞と称する）（物事）を導入する機能を持つ（藤、小川 2007、藤 2009a、b、c、2010、2014、Teng 2009、Teng *et al.* 2010）。たとえば、

- (1) 学校门口有一棵树，直径一米多，据说有二百多年的树龄。

木が校門の前にある。直径が1メートルを超え、二百年以上の樹齢を持つと言われています。

- (2) 很久很久以前，这里住着一个老爷爷。

大昔、おじいさんがここに住んでいました。

さらに、中国語の数量詞は物語が起きた非特定の場所と時間を導入する機能を持っている。たとえば、

- (3) 很久以前，在一座山上，有一位老和尚。一天，老和尚出去打水...

大昔、ある山に年配の僧侶が住んでいました。ある日、彼は外へ水を汲みに行った

...

これらの機能は日本語のアルの用法と重なる部分がある。特に中国語の“有”は、一般的に新情報の名詞しか導入しない場合もある(たとえば、Huang 1987, Chang 2004, Hu & Pan 2007) ため、さらにアルの特徴と重なる。たとえば、以下の日本語とその中国語訳の文を見ると分かりやすい。

- (1) 昨日ある人が、この町にバイクに乗って交通ルールを無視して暴走した後、逃げたてしまった。
昨天有一个人，无视交通规则骑着摩托车在这个街上乱奔，然后逃之夭夭。
- (2) ある日、トラちゃんが友達と外で遊んでいたとき、突然雨が降りだした。
有一天，小虎和朋友一起在外面玩时，突然下起了雨。
- (3) ある山に年配の僧侶が住んでいました。
有一座山上住了一位老和尚。

注意すべきことは、数量詞が導入する新情報名詞が、話題名詞に限られている(藤、小川 2007、藤 2009a、b、c、2010、2014、Teng 2009、Teng *et al.* 2010) ことである。先行研究の詳しい考察があるため、本稿ではこれ以上贅言を要しない。以上の数量詞が話題名詞を導入する用法は、新情報の導入する用法として扱われることが少なくない(たとえば、呉 2005)。数量詞が新情報導入するとの言い方が正しくないことは多くの研究に明らかにされた(Sun1988、Li 2004、刘 2004、藤、小川 2007、藤 2009a、b、c、2010、Teng *et al.* 2010)) が、一般の中国語母語話者には数量詞が新情報を導入するイメージがあることを否定できない。これらの類似するところがあるため、中国人の日本語学習者にとって、アルを用いやすいと考えられる。しかし、アルは以上の数量詞用法と類似するが、その違いもあると考えられる。これまでの日中言語における数量詞についての先行研究は、両言語の数量詞自身に注目するのが少なくない。しかし、以上中国語の数量詞と日本語のアルに関する対照研究は少ない¹。日本語のアルについての関連研究も少ない²。日本語の文法書やテキストはこれについての説明もほとんどない³。中国で出版した中国人日本語学習者の誤用に関する専門書と論文集にもそのような紹介や考

¹ たとえば、望月 1974、中川 1982、中川、杉村 1975、輿水 1986、中川、李 1997 等、樋口 2007b、趙 2011。

² 「～である」中の「ある」などに関する研究(たとえば、山梨 1995: 67、益岡 1987: 202-203、益岡 1997:188-193、副島 2003、副島 2006) などが少なくないが、本研究の内容と関連する研究は少ない。

³ たとえば、『ケーススタディ日本文法』(寺村等 1987)、『学習者の発想による日本語表現文型例文集』(坂本 1996)、『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(庵功等 2001)。

察がほとんど見当たらない⁴。この違いを解明し中国人の日本語学習者に説明しなければ、その誤用を犯しやすい。本稿では、中国語の数量詞とアルについて対照研究を行う⁵。

2. 調査材料

先行研究によく用いられる童話『桃太郎』の日中言語両バージョンの冒頭部分の文章を材料（材料1と材料2に参考）として、中国語の数量詞と日本語のアルを比較してその異同を考察する。物語の冒頭部分を用いる理由は、数量詞の話題導入および物語の発生場所と時間の導入する対象は全部新情報なためである。また本研究で扱っているアルの関連用法も新情報の導入ともかかわっているからである。一般的に、物語の冒頭部分の文章で紹介した物事の多くが初登場の新情報名詞である。したがって、『桃太郎』の日中言語両バージョンの冒頭部分を本研究の調査材料として使用する。材料1は大河内（1985）の研究材料に基づいて調整したものである。大河内（1985）の研究材料には30個の調査項目の名詞の前に、文法上必要かどうかに関係なく、調査のために数量詞を入れる空白を作った。Teng（2010）は同じ材料を用い、中国人（中国語母語話者）にその項目の名詞に数量詞が要るか、あってもなくてもいいか、あってはいけないかについて調査を行った。その結果に基づいて、本研究の目的に合わせて必要な数量詞を補って材料1を作った。大河内（1985）の研究材料は附録1を参照。

材料1 『桃太郎』の冒頭の部分の中国語バージョン

很久很久以前，在 1) 一个地方，住着 2) 一个老爷爷和老奶奶，3) 一个夏天，老爷爷要上山打柴。老奶奶：“快去快回啊！”老爷爷走后，老奶奶又自言自语：“哎，我也到河边洗衣服去吧。”说完她就端着盆到河边去了。哗啦哗啦，哗啦哗啦，老奶奶使劲地洗。洗了一会儿，忽然看见有 4) 一个东西从上游一起一浮地飘下来。老奶奶使劲地停住手，歪着脑袋思忖起来。那东西圆乎乎的，有西瓜那么大；白里透绿，绿中泛红。说它像桃子吧，却比桃子大；说它像瓜吧，又比瓜圆。就在她想着的当儿，那东西已经飘过来，可以看得清清楚楚了。原来是很大很大的 5) 一个桃子。

材料1中の2)の下線部分にある“一个老爷爷和老奶奶”は、“一个老爷爷和一个老奶奶”に交換できる。しかし、習慣としては、“老爷爷”と“老奶奶”が一緒に並ぶ場合に後者の“一个”が省略される可能性がある。これは“一个”が必要でないことと異なり、繰り返して言わず、“老爷爷”前の“一个”がそのすぐ後ろの“老奶奶”も導入している。“老爷爷和老奶奶”

⁴ たとえば、《中国日语学习者偏误分析》（王忻 2006）。

⁵ 本研究で扱った“有”またアルは主に話題を談話に導入する物である。藤（2015）は日中言語の存現文における数量詞の対照研究を行った。存現文の中に“有”またアルの文があるが、その研究で扱った問題は本研究と異なる。

には“一个”一つで十分なので、材料 1 の 2) の下線部分を“一个老爷爷和老奶奶”で表示した。

材料 1 に対応する日本語の訳文 (材料 2) は樋口 (2007a) の研究材料に基づいて作ったものである。樋口 (2007a) の日本語訳は附録 2 を参照。

材料 2 『桃太郎』の冒頭部分の日本語バージョン

むかし、むかし、1) あるところに、2) あるおじいさんとおばあさんとが、住んでおりました。3) ある夏の日のことでした。おじいさんは山へシバかりに出かけました。「行ってらっしゃい」おばあさんはおじいさんを送り出すと、「どれ、どれ、わたしは、川へせんたくに行きましょう。」とたらいをかかえて川へせんたくに出かけました。「ざぶざぶ、ざぶざぶ」おばあさんはせいでしてせんたくをしました。すこしすると、川上から 4) あるものがうきしずみして流れてきました。「はて、なんだろう。」おばあさんは、せんたくをやめて、あたまをかしげて考えました。まるいものです。スイカぐらいの大きさです。白くて、青くて、うす赤です。桃にしては大きいし、ウリにしてはまんまるだし。と、もうそれは見えるところにやってきました。それは 5) ある大きな大きな桃だったので。

材料 1 から本研究と関係がある 5 つの名詞また名詞句 (下線部分) を本研究の考察項目とする。この 5 つの項目はすべて話題、物語の発生場所、時間で、数量詞により導入されている。以上の数量詞は中国語の母語話者により不可欠だと確認された (Teng, 2010)。1) は物語の発生場所で、非特定である。3) は物語の発生時間で、非特定である。その他の 3 項目は全部話題である。以上の 5 項目において、中国人の日本語学習者はアルでその名詞を導入するケースが少なくない。たとえば、

- (7) むかし、むかし、あるところに、あるおじいさんとおばあさんとが、住んでおりました。
- (8) ある夏の日のことでした。おじいさんは山へシバかりに出かけました。
- (9) すこしすると、川上からあるものがうきしずみして流れてきました。
- (10) と、もうそれは見えるところにやってきました。それはある大きな大きな桃だったので。

以上の現象から、中国人の日本語学習者は“一个”というような数量詞を日本語のアルに訳すことがあるとみられる。本稿はなぜ中国人の日本語学習者が“一个”をアルで表す

かの具体的な理由について考察しない。前述の通り、本稿の研究重心は以上の中国語数量詞の用法とアルの異同について解明することである。中国語において、以上の 5 項目の名詞また名詞句にはすべて数量詞が必要である。しかし、日本語に訳す場合は、以上すべての“一个”をアルに訳せるのか。これを確認するため、材料 2 の下線部分を項目として、日本人（日本語母語話者）に対して調査を行った。

3. 調査

3.1 調査 1

まず、以上の文脈において、下線部分の中国語数量詞の意味がアルで表現できるかどうかを確認する。そのため、日本語の文章において「ところ」、「おじいさんとおばあさん」、「夏の日」、「もの」、「大きな大きな桃」などの名詞（材料の下線付き部分）にすべてアルを加える。アルを加えた文章を日本人母語話者 20 名に、その適切さを確認してもらう。適切ではないと思われる場合、さらにその正しい日本語の表現を教えてもらう。適切さについての判断結果は表 1 の通りである。

表 1. アルの用法に対する適切であるかいやなかに回答する被験者数

		○	×
1	ところ	20	0
2	おじいさんとおばあさん	4	16
3	夏の日	20	0
4	もの	20	0
5	大きな大きな桃	0	20

以上の結果から「ところ」と「夏の日」というストーリー要素の場所、時間および「もの」において日本語の訳文にアルを使用してもいい（20 名の被験者全員認めた）。しかし、「大きな大きな桃」には使えない（20 名の被験者全員認めなかった）ことが分かった。「おじいさんとおばあさん」にアルを加えてもいいと判断した被験者数が 4 名で、加えてはいけないと判断した被験者数が 16 名である。正確二項検定で、アルを加えてはいけないと判断した被験者のほうが有意に多いとみられる ($p = 0.0059$ ** ($p < .01$))。と言うことは、「おじいさんとおばあさん」にアルを使用してはいけなしという認識はより一般的であると言える。したがって、昔話において、人物が初登場する場合には、アルを用いてはいけなし。中国語の場合は、初登場の人物に“一个”などの数量詞を加える必要がある。また、以上の中国語の文を、物語においては“有一个老爷爷和一个老奶奶住在这里”というような“有”の文型に言い換えるのは少なくない。“有”の文型は日本語のアル

ルと対応できるが、その名詞には“(一)个”のような数量詞を加える必要がある。滕(2014)は詳しい実証的考察を行い、その結果、“有”の文型において初登場の人物が話題になり、その初登場の話題に数量詞が不可欠であることが分かった。以上の文脈の意味を表すため、数量詞は必要条件であるが、“有”はそうではない。“有”がなくて、その数量詞だけでも“有+数量詞”と同じ意味を持つ。したがって、数量詞だけでも中国語母語話者の認知上“有”の概念をも反映していると考えられる。“有”の基本的な用法は存在を表す。アルの一般的な用法も存在を表す、つまり“有”の概念や意味を表すことである。しかし、中国語の場合は初登場の人物を“有+数量詞”で表せるが、日本語の場合は同じようにアルを使用してはいけない。以上、物語の初登場の人物を導入する中国語の数量詞(また“有+数量詞”)を、アルに訳してはいけないことを確認した。これに対し、なぜ“地方”、“夏日”においては中国語の数量詞、また“有+数量詞”を日本語のアルに訳せるのか、またアルが不可欠であるのか、以下で検討する。

3.2 調査2

以上調査1の結果は、「ところ」と「夏の日」をアルで修飾できることを確認したが、アルがなければ、同じ文脈の意味を表せるのか、つまり、なくてはならないのかを確認していない。また、「おじいさん」、「おばあさん」、「大きな大きな桃」にアルを付けてはいけないことを確認したが、アルがなければその文は成立するのかを確認していない。そのため、調査1の被験者に引き続いてこの2項目にアルがなければ同じ文脈の意味を表せるかと尋ねた。「ところ」と「夏の日」にアルがなくてはならないのか、および「おじいさん」、「おばあさん」、「大きな大きな桃」にアルを付けてはいけないかをも尋ねた(調査2)。アルがなければならぬ回答は○を付け、あつてはいけない場合は×を付け、あつてもなくてもいい場合は△をつけるように、それぞれの回答人数は表2の通りで表す。

表2. アルが必要、不要、また両方可におけるそれぞれの回答被験者数

	○	×	△
1 ところ	20	0	0
2 おじいさんとおばあさん	0	16	4
3 夏の日	17	0	3
4 もの	16	4	0
5 大きな大きな桃	0	20	0

調査2の結果は、「ところ」においては、20名の被験者全員アルを付ける必要がある

と判断した。「夏の日」においては、付ける必要があると判断した人がいない。付けてはいけないと判断した被験者が 16 名で、付けてもつけなくてもいいと判断した被験者が 4 名で、Fisher's exact test で分析すると両者の間にとっても有意な差が見られる ($\Phi=0.339$, $p<.01$)。と言うことは、「ところ」と「夏の日」においてアルが不可欠である。これに対し、「おじいさん」、「おばあさん」、「大きな大きな桃」にアルを付けてはいけないことを示している。検定の結果は以下のとおりである。「大きな大きな桃」において 20 名全員アルを付けてはいけないと回答したので、傾向が明らかで検定する必要がない。「おじいさんとおばあさん」に付ける必要があると回答した被験者は 0 名、付けてはいけないと判断した人数は 16 名、あってもなくてもいいと判断した人数は 4 名である。後者の二つの間において Fisher's exact test で分析すると、 $\Phi=0.289$, $p<.05$ 、有意な差が見られる。なぜ「ところ」と「夏の日」にアルが必要であるのか。この場合のアルは中国語の“一个”に訳せるが、意味としては単純な中国語の“一个”だけではなく、“某一个”として考えられる。それは特定しない物事を指す。つまり、アルはストーリーにおいて特定しない物事を導入するとき用いるとみられる。これと異なり、中国語数量詞は初登場の話題とする物事を導入する。昔話の『桃太郎』においては、「あるところ」や「ある夏の日」は具体的に特定する必要がなくても、ストーリーのプロットに影響を与えない。むしろ特定しにくい、あるいは特定しないほうがよいため、アルを用いられたと考えられる。「おじいさん」、「おばあさん」、「大きな大きな桃」はストーリーに初登場してから、引き続いて登場する。つまり、物語において多くの話がそれらをめぐって展開し、自然に特定されていく。したがって、「おじいさんとおばあさん」、「大きな大きな桃」にはアルが要らない。中国語の“一个”などの単数数量詞、また“有一个”などは初登場の話題名詞を導入できるが、アルではそれを反映できない部分がある。しかし、4) の下線部分においては、「もの」が話題で、後文にそれについての話がある一方、なぜアルを導入されてもいいのか。その理由は以下のように考えられる。「もの」は「おじいさん」、「もも」などと異なり、範囲の制限のない物理的な存在を指しているため、聞き手にとって漠然とし過ぎる概念である。概念が広すぎで、聞き手にとって「もの」の範囲をすぐ特定しないと、文章の理解へ困惑に陥ってしまう。「もの」を特定するには、修飾語で限定するなどができる。たとえば、「忽然看见有 一个东西从上游一起一浮地飘下来。」の部分において樋口 (2007a) の翻訳原文は以下の通りである。

(11) 川上からうきしずみして流れてくるものがありました。

(11) には、「もの」の前に修飾語があるようにして、アルを用いなくても自然な日本

語である。そして、調査の被験者全員に4)の「もの」を、「桃」や「スイカ」などの具体的な概念を持つ名詞に入れ替えれば、その文章は通じるかどうかをも確認した。全員が「もの」ではなく、具体的な概念を持つ名詞であれば、アルを使ってはいけないと回答した。と言うことは、一般的な場合に、初登場の特定する話題名詞をアルで導入できないが、修飾語がない「もの」においては例外である。

以上の考察結果を以下のようにまとめる。中国語の話題名詞は初登場する際に数量詞が必要である。その数量詞は中国人の日本語学習者にアルと訳されやすい。しかし、物語においては、この場合の数量詞をアルに訳せないことが多い。なぜかと言えば、日本語のアルは物語において特定しない物事だけに用いられるためである。物語中の名詞は特定される場合が多いため、アルを使用してはいけぬ。しかし、その名詞は修飾語がない「もの」だけであればアルを用いてもいい。特定しない物語の発生場所（たとえば、「ところ」と発生時間（たとえば、「日」）にはアルが必要である。これらの場合、アルは中国語の“一个”などの数量詞また“有一个”に相当する。以上考察した項目は昔話におけるものである。昔話においては、初登場の人物にアルを用いないと被験者によく言われた。昔話ではなければ、初登場、また非特定の人物であれば、アルを用いるのかに関しては以下で考察する。

3.3 調査3

一般的な文章における初登場の話題名詞にアルを加え、その文が成立するかを日本人の母語話者8名に確認する。

(12) 昨日はある人がうっかり川に落ちたが、助けられた。

(13) 昨日はあるテレビ局がこの地域の大气汚染の問題を報道した。

確認した結果、以上のアルがあっても正しいと全員により判断された。この場合にはアルの附加により、修飾された物事の背景情報を簡潔化する。つまり、特定しないようにする。以上の「ある人」は中国語の“一个人/有（一）个人”と似ている。しかし、“一个/有（一）个”が“人”を導入する場合、その“人”の背景を後文で提示しても自然である。これに対し、アルが「人」を導入する場合には、その「人」の背景情報について後文で提示されない。たとえば、

(14) *昨日はある人がうっかり川に落ちたが、助けられた。その人は田中さんの息子だった。

- (15) *昨日はあるテレビ局がこの地域の大気汚染の問題を報道した。そのテレビ局は環境保護テレビ局だった。

以上の文脈を正しく表すため、以下のような文章に修正すればいい。

- (16) 昨日は人がうっかり川に落ちたが、助けられた。その人は田中さんの息子だった。
(17) 昨日はテレビ局がこの地域の大気汚染の問題を報道した。そのテレビ局は環境保護テレビ局だった。

“一个/有（一）个”が“人”を導入する場合、と“一家/有（一）家”が“电视台”を導入する場合は（14）と（15）のような制限がない。たとえば、（16）と（17）の中国語翻訳（18）と（19）には、後文でその話題名詞の背景を提示したが、数量詞を付加する必要がある。逆に数量詞がなければ、以下の二文は成立しない。なぜかと言えば、提示した名詞の背景情報があって、その名詞が必ず話題名詞になるため、数量詞が不可欠だからである。

- (18) 昨天一个人/有（一）个人不小心掉到河里去了，不过被救上来了。那个人原来是田中先生的儿子。
(19) 昨天一家/有（一）家电视台报道了这个区域的大气污染问题。原来那家电视台是环境保护电视台。

以上の分析結果を以下のようにまとめる。昔話と異なり、一般的な文章にはアルは場所と時間以外の名詞に加えることができる。アルの附加により、名詞の背景情報は簡潔化され、つまり非特定される。この場合は数量詞の話題導入する用法と似ている部分があるが、同じではない。数量詞の話題導入する用法において、話題名詞に関する背景情報が後文にあってもよい、つまりその名詞は特定してもいい。一方、アルが名詞を導入する場合はその名詞についての背景情報を提示しない。つまり、アルの附加により、その名詞は特定されないことになる。

4. 総合まとめ

アルの一般的な用法は存在を表す、つまり“有”の概念や意味を表すことである。しかし、中国語の場合には初登場の人物を“有+数量詞”で表せるに対し、日本語の場合には使用してはいけない。昔話における初登場の人物を導入する中国語の数量詞（また“有”+数量詞）を、アルに訳してはいけないことを確認した。

先行研究により、中国語の話題名詞は初登場する際に数量詞が必要である。その数量詞は中国人の日本語学習者にアルと訳される場合が少なくない。しかし、昔話においては、数量詞をアルに訳せないことが多い。なぜかと言えば、日本語のアルは物語において特定しない物事だけに使用されるためである。しかし、昔話において話題名詞は特定されない場合が多いため、アルが使用できないことも多い。注意すべきことは、その名詞は修飾語がない「もの」だけであればアルを使用してもいいことである。特定しないストーリーの発生場所（たとえば、「ところ」）と発生時間（たとえば、「日」）にはアルが必要である。これらの場合、アルは中国語の“一个”などの数量詞また“有一个”に相当する。

昔話と異なり、一般的な文章にはアルは場所と時間以外の名詞にも付加できる。アルの附加により、名詞の背景情報は省略化され、つまり非特定にされる。この場合は数量詞の話題導する用法と似ている部分があるが、同じではない。数量詞の話題導入用法の場合は、話題名詞についての背景情報が後文に出ててもよい、つまりその名詞は特定してもよい。

参考文献

- 庵功雄、高梨信乃、中西久実子、山田敏弘 2001. 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（白川博之監修）。東京：株式会社スリーエーネットワーク
- 趙小鳳 2011. 日本語と中国語の数量表現について、『上越教育大学国語研究』第 25 号, 71-63。上越教育大学国語学会
- 呉麗君 2005. 談話における不特定を表す「数詞+量詞」の構造、『中国語の誤用分析：日本人学習者の場合』（西川和男編訳），52-69。大阪：関西大学出版部
- 樋口幸子 2007a. 「数量詞の表現誤用に関する一考察—誤用調査および誤用防止へむけた一提案」、『中国語教育』第 5 号, 46-67。中国語教育学会
- 樋口幸子 2007b. 単数時の数量詞付加に関する考察、『日中言語対照研究論集』第 9 号, 89-103。日中対照言語学会
- 輿水優 1986. 『中国語の語法の話：中国語文法概論(中国語研究学習双書 8)』。東京：光生館
- 益岡隆志 1987. 『命題の文法：日本語文法序説』。東京：くろしお
- 益岡隆志 1997. 『新日本語文法選書 2 複文』。東京：くろしお
- 益岡隆志、田窪行則 1992. 『基礎日本語文法—改訂版』。東京：くろしお
- 望月八十吉 1974. 『中国語と日本語（中国語研究学習双書 13)』。東京：光生館

- 中川正之 1982. 中国語の名詞と日本語の名詞, 『未名』 2号。神戸大学中文研究院
- 中川正之, 李浚哲 1997. 日中両国における数量表現, 『日本語と中国語の対照研究論文集』, 95-116。東京: くろしお出版社。
- 中川正之, 杉村博文 1975. 日中両国語における数量表現, 『日本語と中国語の対照研究』 1号, 日中語対照研究会
- 王忻 2006. 《中国日语学习者偏误分析》。北京: 外语教学与研究出版社
- 大河内康憲 1985. 量詞の個体化機能, 『中国語学』 232, 1-13。日本中国語学会
- 劉憲民 2004. 汉语“一”+ 量詞的意義及功能-与英語“a(n)”之比較, *Journal of the Chinese Language Teachers Association* 39: 1, 85-99。
- 坂本正 1996. 『学習者の発想による日本語表現文型例文集』。東京: 凡人社
- 副島健作 2003. 「シテアルとスルシテイルとの関係について」, 『留学生教育』 第1号, 1-13。琉球大学留学生教育センター
- 副島健作 2006. シテとシツツをめぐって: アスペクト論の観点から, 『留学生教育: 琉球大学留学生センター紀要』 第3号, 7-24。琉球大学留学生センター
- 寺村秀夫、鈴木泰、野田尚史、矢澤真人 1987. 『ケーススタディ日本文法』。東京: 桜楓社
- 滕小春, 小川泰生 2007. 中国語数量詞の話題導入機能, 『人間科学研究』 第2号, 47-57。広島大学総合科学研究科。
- 滕小春 2009a. 打破理性, 创造情绪的“(一)个”, *US-China Foreign Language* 7 (9), 11-16.
- 滕小春 2009b. 不定冠詞と中国語数量詞の話題導入機能の比較研究, 《欧米文化研究》 第16号, 133-145。広島大学社会科学部国際社会論専攻
- 滕小春 2009c. 中国語単数数量詞の数量、属性表現に関する一考察: 英語不定冠詞との対照研究, 『東アジア言語研究』 第12号, 32-45。東アジア言語学会
- 滕小春 2010. 漢語名詞的性質和數量詞使用的關係, 《華語文教学研究》 第七卷第2期, 25-38。世界華語文教育学会
- 滕小春 2014. 數量詞話題導入功能的適用名詞範圍, 《華語學刊》 第17期, 8-33。台湾華語文教學學會
- 滕小春 2015. 日中數量詞用法の違いと中国人日本語学習者の誤用---存現文において, 『北研学刊』 第11号。東京: 白帝社
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』。東京: ひつじ書房
- Chang, H.-H. 2004. The definiteness and information status of the NPS in Mandarin You-existentials. The 16th North American Conference on Chinese Linguistics

- (NACCL-16) 21-23. The University of Iowa, May 21-23, 2004.
- Cheung, Hung-nin Samuel 1977. A Study on the Use of *yige*. *Journal of the Chinese Language Teachers Association* 12: 2-7.
- Huang, C.-T. J. 1987. Existential sentence in Chinese and (in) definiteness. *The representation of (in) definiteness* (pp. 226-253). Cambridge, MA: The MIT Press.
- Hu, J., & Pan, H. 2007. Focus and the basic function of Chinese existential *you*-sentence. *Existence: Semantics and syntax* (pp. 133-145). Netherlands: Springer.
- Li, W. 2004. The discourse perspective in teaching Chinese grammar. *Journal of the Chinese Language Teachers Association*, 39(1), 25-44.
- Sun, C. 1988. The Discourse Function of Numeral Classifiers in Mandarin Chinese. *Journal of Chinese Linguistics* 16: 298-323.
- Teng, X. 2009. An Experimental Investigation of “(yi) CL” in “Shi (yi) CL NP”. *US-China Foreign Language* 7, 12: 37-43.
- Teng, X., Y. Ogawa, and J. Yamada 2010. Japanese Learner’s Characteristic Errors of the Chinese Numeral Classifier Sequence *yi ge*: Learning and/or Unlearning? *Journal of the Chinese Language Teachers Association* 45, 1: 89-101.

附錄 1. 大河内 (1985) の研究材料

很久很久(1)以前，在(2)地方，住着(3)老爷爷和(4)老奶奶，(5)夏日的一天，(6)老爷爷要上(7)山打(8)柴。(9)老奶奶：“快去快回啊！”

(10)老爷爷走后，(11)老奶奶又自言自语：“哎，我也到(12)河边洗(13)衣服去吧。”说完她就端着(14)盆到(15)河边去了。哗啦哗啦，哗啦哗啦，(16)老奶奶使劲地洗。

洗了一会儿，忽然看见有(17)东西从(18)上游一起一浮地飘下来。(19)老奶奶使劲地停住(20)手，歪着(21)脑袋思忖起来。那(22)东西圆乎乎的，有(23)西瓜那么大；白里透绿，绿中泛红。说它像(24)桃子吧，却比(25)桃子大；说它像(26)瓜吧，又比(27)瓜圆。就在她想着的(28)当儿，那(29)东西已经飘过来，可以看得清清楚楚了。原来是很大很大的(30)桃子。

附録 2. 大河内（1985）の研究材料における樋口（2007a）の日本語訳

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが、住んでおりました。ある夏の日のことでした。おじいさんは山へシバかりに出かけました。「行ってらっしゃい」おばあさんはおじいさんを送り出すと、「どれ、どれ、わたしは、川へせんたくに行きましょう。」とたらいをかかえて川へせんたくに出かけました。「ざぶざぶ、ざぶざぶ」おばあさんはせいだしてせんたくをしました。すこしすると、川上からうきしずみして流れてくるものがありました。「はて、なんだろう。」おばあさんは、せんたくをやめて、あたまをかしげて考えました。まるいものです。スイカぐらいの大きさです。白くて、青くて、うす赤です。桃にしては大きいし、ウリにしてはまんまるだし。と、もうそれは見えるところにやってきました。それは大きな大きな桃だったのです。